

セツ つぎん

No.59



ひ と 言

データが語る教育の危機

中森 孜郎 (代表運営委員)

今年三月、東京の清瀬中二年の女生徒がマンションから飛び降り、自殺した。残されたノートには、「もう私は死にたい。学校なんか行きたくない。皆が敵に見えるから。」「学校にいる時間、私には苦痛に感じる」と書き残されていた。これはきわめて例外的な一つの不幸な事件なのだろうか。警察庁によれば、昨年度の小・中・高生の自殺者は五百名を超えている。死にたいと思った子どもの数は測り知れない。自殺とか自殺と言われるが、子どもは自ら死を選んだのではなく、自殺という行為に追い込まれたのではないか。

〇七年度学校での暴力行為は過去最高の五九六一八件を記録した。三年前の一・七五倍に達している。〇六年度厚労省調査では、中学生の「うつ症状」は四人に一人だという。子どもだけではない。〇七年度公立校教師の精神疾患(主にうつ病)による休職者数は過去最高の四九九五名(二〇〇〇年度は約二〇〇〇名)に達している。

学校は本来、子どもにとっても、教師にとっても、楽しいところであるはずである。この異常さに気づかない異常さ、それがさらに教育の危機を深めている。

目次

ひと言	中森 孜郎	1
特集 シリーズ「憲法って何なんだろう」		2
作曲家・林光さん 高校生との公開授業		
高校生参加者の感想		11
一般参加者の感想		
林光さん公開授業に参加して	目黒 恵子	12
ひとり ひとり(の・と)憲法	堀口 明子	13
高校生の公開授業を参観して	池川 尚美	14
保健室からの報告		
養護の仕事に自問する日々	賀谷あゆみ	16
追悼 芳賀直義 先生		18
私と山		
山と自分	平居 高志	19
青葉山は「宝の山」・・・	移川 仁	21
子どもの一週間		23
センター日記		24

特集 シリーズ「憲法って何なんだろう」

作曲家・林光さん 高校生との公開授業

ひとりひとりの憲法

4月10日、「日本国憲法を学び耕す会」（代表出浦秀隆さん）主催で、作曲家・林光さんによる高校生対象に、「ひとりひとりの憲法」と題する公開授業がもたれました。高校生は定員40名に50名が集まり、一般参加者は県外からの28名を入れて150名でした。会場のフォレストホールに据えられたピアノと林さんと高校生が向かい合い、半円形で囲むように参加者が位置して休憩をはさむ90分の授業。授業は、ほとんど林さんのお話とピアノで進みました。その後第2部として、林さんの1クワの時間がとられました。以下は、その報告になります。（授業記録については林さんにご覧いただいておりますので、文責はすべて編集部にあります。）

高校生のみなさんに

十何年も前のことだ。

中学生が自由な髪型にすることが流行り、いくつもの学校がそれを禁じた。したがわなかった生徒がハサミで髪を切られた。だれかが言った。髪ぐらいなんだ。切ったって血も出ないし、痛くもないじゃないか。

ぼくは、そうは思わなかった。

じぶんのきもちに反して髪を切られるのは痛いし、目には見えない血も流れる。ぼくはじぶんで詩を書き、「じぶんはひとり」という歌をつくった。

ひとはさまさまはなすことばも

てあしもかおもかみのけも

ながいかみみじかいかみ

なみうつかみきつくむすんだかみ

つくりながら、夫に死なれ、心ならずも髪を切って尼になった江戸時



代の女のこと、学問を捨て、恋人と別れ、頭を丸刈りにして戦場へ向かった昭和時代の青年のことを、ぼくは思った。

「じぶんはひとり」は、ぼくの憲法だ。

だれもが心のなかに、じぶんだけの憲法を持っている。でなければ持つことができないと、ぼくは思う。

そんな話をきいてもらったり、いつしよに歌をうたったりして、ひとときを共にすごしたい。

林 光

「ひとりひとりの憲法」授業のながれ

今日は。大勢来てくれてうれしいです。高校生のみなさんと話をすることを僕はとても楽しみにしていました。

今日は4つくらいのかたまりのお話をしようと思いますが、最初に、『じぶん』はひとり」という歌のお話からしようと思います。「ピアノを演奏し歌う」

こういう歌ですね。

まゆみは話すとき目を丸くする／さとしは腕をふりまわす／みさこはつれいとき額に皺を寄せ／たかおは怒ると目をつぶる

ここまでは、イントロです。

「あしびぎの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」という短歌を知ってらっしゃる方もいますね。あれは、「ながながし夜をひとりかも寝む」「長い夜ひとりで寝るのかよ」というだけの歌です。その前の「あしびぎの山鳥の尾のしだり尾の」までは、長いにかかるイントロなんです。ぼくのこの歌も、ここまではイント

ロです。

じゃあ本体は何かというと、「ひとばさまさま、話す言葉も手足も顔も髪の毛も」。その髪の毛の話が本体ですね。「長い髪短い髪、波打つ髪、きつく結んだ髪」。ひとりひとり違うんだという歌です。

なぜ、この歌をつくったかというと、チラシにも書きましたけど、二十年くらい前かな、ある中学で子どもたちが自分たちの好きなようにいろいろな髪型にした。それを、そうしてはいけなと言われたんですね。その時に、「髪の毛ぐらい切ったって痛くもなんともないじゃないか、そんなの我慢しろ」という言い方をした大人がいた。その痛くもなんともないじゃないかということに、ぼくはちよつと疑問を持ったんですね。

なるほど、腕を切られたり、足を蹴られたりするとも痛い。それと同じように、髪の毛を切ることなことが、そんなに我慢できないことなのかと多くの人は考えるけれども、ぼくはそうじゃないような気がした。人は自分の髪の毛のあり方を「おまえ違つ、

こうしちゃいけない」というふうに言われるのは、やっぱり言われる人間にとつては、つらいことだろうと思った。それで髪型自由中学生のプライベートな応援歌みたいなつもりで、この歌をつくったわけです。

その時に、ずっとぼくの子どもの頃からいろいろな出来事を思い出してみました。髪を切るということが、どういう場面で人びとに、特に日本人に起こったかということとです。

一番思い出されるのは、ぼくの兄貴とか、父親とかの世代が、兵隊になるときに頭を丸坊主にしました。特にぼくが小学生のころには、それまで普段の仕事を自分の家でしたり、あるいは勉強するために大学に行ったりしていた大勢の若者たちが、たぶんあんまり自分の気がすまないままに、頭を丸く剃って兵隊に行ったという記憶がありました。それは、やっぱり兵隊に行った若者たちにとっては辛いことだったんだろうと思います。

そのことで、もつと昔までさかのぼって考えてみようかなとぼくは思った。坊さんになるので出家をする。まず頭を剃る。それは、どういう意味があるか。専門家は、いろんなことを知っているかもしれないけど、ぼくの考えでは、頭を剃って仏門に入るというこはいつべん自分が死ぬ。この世の中の自分というものにけりをつけて、新しい生き方をするためにいつべん死ぬんだという。そういう儀式だと、ぼくは

林光さん公開授業に参加して

目黒 恵子

「息子よ明日はすべてが変わっている
だろう／苦しみは裏口から出て行き二
度と戻ってこないだろう／農夫は自分
の土地にしっかりと立ってほほえみ／勞
働者の娘ももう街角で身売することは
ない／いなか道も川の流れもアスファ
ルトの道路も／にこにこ笑いながら暮
らしを運んでいく／息子よ明日はすべ
てが変わっているだろう／銃弾も鞭も
牢獄の鉄格子ももうないだろう／お前
は息子と手をつなぎ通りを散歩するだ
ろう／私がお前と一緒にしたくてもで
きなかつたことを／若く楽しい月日を
囚われて暮らすこともなく／遠い異国
の土地で死ぬこともないだろう／愛し
合うものたちはいつも一緒に暮らし／
祖国の大地の上で楽しく眠るだろう／
息子よ明日はすべてが変わっているだ
ろう／苦しみは裏口から出ていき……」

〔告別〕林光詩・曲

ニカラグアのエドウィン・カストロ
が獄中で書いたといわれる原詩に林光
さんが作曲した『告別』という歌を、
私たち合唱部は昨年の定期演奏会で歌
いました。中学や高校の音楽の教科書

には古典的な芸術歌曲の他には、夢
や『希望』を歌ったものが多い中、林
光さんの『ソング』といわれる歌は、
人権や差別や平和についての率直に問
いかけてくる歌が多いです。この『告
別』も女子高生にとってはちよつとど
きつとする歌詞だと思えます。これら
の歌詞をどう受け止め、表現するか、
新聞を読んだり、話をしたりして取り
組んできました。確かに平和ぼけして
いる今の人たち（もちろん私を含め！）
ですが、一たび目を向けかえれば日本
の中にも、世界中にはあふれるほど確
かに存在している「事実」にどのよう
に目をむけ、意識をもって生活してい
くか、私は歌を通して、少しでも考え
させていければなあと思っています。

このたびの林さんの公開授業の話は
日食先生からお誘いいただき、現在勤
務している白石高等学校の生徒20数名
とともに参加いたしました。参加した
生徒のうちのほとんどはこのように林

光さんに音楽を通して触れてきた合唱
部の生徒たちでした。特に今年の定期
演奏会では林光さんのオペラ『七口弾
きのゴーシュ』にも挑戦している真っ
直中だったので、「いつたいどんな話
をするんだろう」「ピアノが聴けるか
も!?」「あわよくば……ソング歌い
たい!」という少々「憲法の授業」と
いうところからははずれた野心満々
（!?）で参加していたわけです。そん
な生徒たちが当日残した感想は次のよ
うなものでした。

・改めて歌ってすごいなあと思いました。
戦いの時にも、憲法にも……歌って
すべてのことに通じるんだなあと思
いました。

・「憲法」と聞いていたので、日本国憲法
とかの固い話かなと思っていましたが、
演奏などもふまえていて、自分の憲法
ということ講演を通して知って気を
楽にして聞けました。最後の「裸の島」
のテーマ曲を林さん自身が演奏してい
るのを見て、とても迫力があって感
動しました。

・「森は生きている」などの林さんの音楽
大好きです。きれいで、落ち着く曲調
というのもあるけれどとてもあつたか
みにあふれていて。今日の講演をきい
て、なるほどって思いました。人間の
個性などいろんなことについての信念
をしっかりとっていらつしやる。それ
がそのまま音楽ににじみ出ているんだ
なあ、演奏してくださつたそれぞれの
曲に林光さんがいたように感じました。
憲法の話ってなにをするんだろうとお

もっていましたが、憲法ってつまりそ
の人の考え、信念、個性なんですね。
私も光さんのように、しっかりと
自分だけの憲法をもちたい。どうもあ
りがとうございました。

♪♪♪♪♪♪♪♪

この公開授業の後、生徒の控え室へ
行ってみると、感想用紙を前にして、
もつと歌いかけたといわんばかりに
生徒たちはみんなで次々と林さんのソ
ングを歌っていました。そしてこの感
想文を後で見せていただき、予想通り、
音楽を媒介とした理解の仕方だつた
のだなと思いましたが、私はそれで良
かつたのではと思つています。音楽家
である林光さんの作品を通して林光さ
んにふれ、そこから現代の社会問題に
も目を向け意識をもつていつてくれれ
ば、むしろそこをつないでやるのが教
師である私たちの仕事かなと改めて思
いました。これからも良いもの、本物
に触れる機会を持たせてやりたいし、
音楽を通して大切なことを伝えていけ
ることを目指していきたいです。

（白石高等学校）



ひとり ひろり 〈の・と〉 憲法

堀口明子

2月の「歌の学校」で「仙台で林さんが高校生に授業する」という噂を耳にし、すぐその場で参加の是非を打診した。「もちろんいいですよ」との返事に、この日をわくわくしながら楽しみにしていた。

仙台駅からタクシーに乗るとあちらこちらで子どもたちがお祭りのための踊りを練習していた。正宗公のお祭りだとのこと。仙台にきた実感とこどものいる町に心をなごませられて会場に到着。

高校生にどんな授業をされるのか高揚する気分を押さえられないでいた。あつかましくも気分は高校生だった。本物の高校生が入場し、中心にすわり、いよいよ始まりだ。

はじまりは、♪「じぶん」はひとり林さんの弾き語り、林さんが出だしをちよつと間違つたら、会場がいつぱんに和やかな雰囲気になつてしまった。深く無限に広がるようなお話だった。ひと言でとか、ひとくくりになんかできない、いや、する必要がないお話だった。

♪「じぶん」はひとり

腕や足を切られるのと違い、髪の毛は痛くもかゆくもないではないか、だから、髪の毛を切るぐらいだと簡単にすまさないでほしい。たどつていけば、戦前、兵隊になるとときには丸坊主にさせられた。意にそわないときの象徴のようではないか。どぎつとした。さらにとどると、出家の時に一度この身とおさらばしての断髪と思うとそれは一回死ぬということ、そんな重い意味をもつ「行為」だ。それぐらいでかたづけられないでほしい。切られる方もそれを見守る周囲のものもつらい。現代の中高校生が選んだ髪型を他の別の力で変えられるというのはつらいことだ。

♪ あしたこそは

戦後、若手作曲家として活躍し始めた頃の作品。北原白秋の断章5節の5番目の歌希望。他の4つと趣が違つた。「あしたこそは」という言葉が何度もリフレインしている。明るくみずみずしくそこに込められた思いにつながる

戦前の生活の一端が意表を突いた。アイスケート場には「男女携走お断り」、意味がよくわからなかった。男女が一緒に滑つてはいけないかった。町でデートでもしようものならとがめられた。御法度。禁じられていた。だから♪あしたこそはに込められた團伊玖磨さん自身のほとばしりであるような、作曲せずにはいられないあつい思いが時代の息吹として伝わってきた。

♪ さくしや

作る側の「ねらいや意図」といったものはあてにならない。(そんな簡単なものじゃないよ。)新藤監督と初めて一緒にやった仕事「裸の島」。『真実』と『事実』は違う。炎天下の畑に真つ昼間水なんかやらない。そんなことは百も承知の新藤監督がそうした。そうすることで報われることの少ない労働が描かれた。作品は事実の羅列だけでは描けないことがある。そういう虚構により描いた方が成功することが多い。けれど同じ映画で新藤監督は島の細い山道を担いでいく天秤棒には本当に水を入れた。はじめはからで行く予定だったが、棒がしならないことがわかった。これはダメだというので役者の殿山泰二さんと乙羽信子さんがかつく天秤棒に水を入れた。はじめは歩けない。周りで見ていたロケ地の島のひとたちは、はじめは遠慮なくゲラゲ



ラ笑っていたが、だんだんうまくなつてきたら真剣に見るようになった。

「耕して天に至る」という字幕を入れていた。岡本太郎が「ない方がいい。この作品のもつスケールが小さくなつてしまふ」。新藤監督は外した。このタイトルを消したことでこの作品は監督が考えていたよりもつと奥の深いものになった。

♪ もうじき春になるだろう

作曲家で指揮者の山田一雄さんの作品(1938年 城左門の詩)。この作品が作られる2年前2・26事件が起こり、後に起こる戦争につながるようなことが政治や経済も戦争に向かつていき、普段の生活も様々などころで締めつけが厳しくなり、自由にものが言えなくなつてきた。もっと自由

にものが言いたい。作者の望みや希望は具体的に書いていない。どういう意図で書いたか分からない。その時代にとだけそれだけのものを書く。

山田一雄さんはそこをとらえて書いた。

曲の最後が  で終わる

「もういいかい」「もう口をきいてもいいかい」「もうさげんでいいかい」「聴く人は聴いてほしい。」

「もういいかい」のあとには「まあ、だよ」が続く。誰でも知っている節をもつてきて非難を封じ込めた。

◇ ずれ

ビバルディとヴィヴァルディの違いとずれ。これは人間の様々な認識のずれだ。ずれがあるとすぐにずれをそろえようとする動きがでる。それはちよつと待ってよという余地がある。たとえば沢村貞子さんがあるとき大きな同じ夫婦茶碗を見つけて喜んだという文章を読んだことがある。男女平等は喜ばしいことだけれど、サイズの違う夫婦茶碗の美しさ、伝統のなかで磨かれた美しさは捨てがたいと思う。すぐに変えるかどうかは別。憲法と私たちの実際の生活の間にもそういういたずれがあること。

憲法は国民の心構えを言っているのではなくて、国が最低保証しなくてはいけないことと説いている。

◇◇◇

スタートからどきつとした。髪の毛のこと。毎日がそのせめぎ合いの中で暮らしているものとしては他人ごとではない。でも、林さんはだからこうしろという緒論をおしつけるのではなく、その矛盾の中で豊かに知恵を絞っていけばいいという方向を示してくれただと思う。一つ一つ、どの話も行き届いた内容を丁寧に話してください。そして気がついたら、警戒なすてきな音楽会になつていた。戦前の自由な時代にこんなにしてきな音楽があつたこと、とことん知恵を絞り、人の心を弾ませないではいられない音楽があつたこと、脅威としか言いようがない。戦後のほとぼり出るような表現せずにはいられない熱気が林さんの生活を通してその事実で、時代そのものが「あしたこそ」をつくらずにはいられなかった作曲者の気持ちが伝わってきた。

「ひとり」とひとりと憲法「すてきなナイトルだ。本当にその通りの内容だった。そして、そのことこそが私たちが憲法を考えていくうえで肝心なことなんだというのを深く解き明かしてくれた。憲法のこと、暮らしのこと、生き方を問い、自分の中でも、もつともつと発酵させ、耕していきたいと思つた。

(東京音楽教育の会)

高校生の公開授業を参観して

池川尚美

「こくごは きれいだ ほんをよんで さくしゃのねらいをかかされる せんせいのとちがうと なんどもかきなおし でもこのあいだ さくしゃのしゅんたろうさんにきいたら こたえはいくつもある それにせんせいのは すこしへんだ」

講師の林光さんが、こう自作の「さくしゃ」を優しく弾き語ると、会場がらくすつとした笑いが起きた。思い当たることがある。70年代前半に思春期を過ごした私など、「せんせいのはすこしへんだ」とばかりに、授業中喰つてかかったものだ。中学高校時代というのは、それまでに教えられ信じてきたこと一つ一つに疑問を持ち、林さんがおつしやる「じぶんだけの憲法」をもつようになって行く時期なのだと思つてきた。

しかし、この授業に参加していた高2の娘は、「級友の半分以上は自分の意見を言えない持たない」と綴っていた。

「……本来自分たちで論議し結論を出すはずのHRは投げやりでどうでも

いいものだと思われている。先生は自由で論議をしなさいと言うが、先生には想定した結論があつて、その結論にならないと不機嫌になることを小学校時代から経験している。議論の先に準備されている答えを探り出し、望まれている姿になろうとする。学校での話し合いは、大人に合わせいくことを覚える場だった。……」

小さい時から自分の気持ちを親に受け止めてもらえずに来た子たち。あなたはこう考えるべき、こうすべきに従い続けるうちに、自分の本当の気持ちさえ分からなくなっている。高校生になって自分たちに決定権が与えられても、自分の意見が持てず、それを活かすことができない。

ひとりひとりの憲法——ひとりひとりが自分らしく生きること、それができることを、今この国の憲法は保障してくれている。しかし、いつも答えは一つであるかのように教え込む教育を受け続け、自分の意見が持てないまま、多様な価値観の渦巻く社会に放り出されることになる彼らは、私たち日本の

みやぎ教育文化研究センター ホームページ開設

2010年7月1日よりスタートする予定です。

アドレスは、<http://www.mkbkc.com>

The screenshot shows the homepage layout. On the left is a vertical navigation menu with items like 'HOME', 'センターについて', 'センターつうしん', 'まなぶ・つくる・つなぐ', '発行ブックレット', '入会のご案内', 'お問い合わせ', '所在地(地図)', and 'リンク集'. The main content area is titled '新着ニュース【お知らせ】' and contains several news items with dates and titles. The right sidebar includes 'センター日記', 'センターの設置', '授業実践の部屋', '授業のための資料室', '写真室', and 'スライドショー'.

研究センターの企画紹介はもちろん、教育・子育てのさまざまな情報を発信し、新たなセンターの交流の場にしていきたいと思います。

会員の皆さんからの情報提供や意見などをいただきながら、充実したホームページにしていきたいと思います。ご期待ください。

憲法のもつ意味をどう理解するのだろうか。かつて高校生たちがあれほど激しく大人世代に抗い獲得した制服からの開放も、「私は私」でいられない今の高校たちにとっては面倒なこと。私服登校の学校でも、制服もどきの「なんちゃって制服」で登校する子が増えている。彼らは日本の憲法なら知って

いると言うだろう。しかし彼らが知っている憲法は、授業で覚えなさいと言われた条文であり、教えられた言葉の羅列でしかないのではないだろうか。次世代に憲法の意味をきちんと理解してほしいと思うなら、子どもの時から一人の人としての彼らの思いを、きちんと受け止めていくことから始めな

ければならないのだと思う。すでに自分の気持ちを言わず15年以上も過ごした高校生には、自分のものとして考えることは簡単ではないだろう。彼らは林光さんの歌のようなこんな気持ちがあつていいのだと思うことから始めなければならぬかもしれない。

林光さんは「子どもの権利条約」の歌を作つてほしいと言われた時、条文をそのまま詞にすることはせず、その本質を表す歌にされたと言ふ。私は授業後しばらくして、このことの意味の深さに気付いた。

(主婦)